

「有人探査チーム計画」

吹田市立豊津第二小学校4年 梅崎 瑛流

太陽系を駆けめぐる探査機がどのくらいあるのだろう。地球の周りを回る人工衛星は、どのくらい速さで回っているのだろう。ぼくは、夜空の星を見上げて、そんなことを思う時がある。

探査機や人工衛星は、便利で人の役に立つ物だ。たとえば、分厚い硫酸の雲でおおわれている、分がらなかつた金星のことが、金星

探査機「あかつき」によって、とても強力な温室効果で、地面の近くでは約460度にもなっていることや、スーパーローションと呼ばれる、とても速い風が吹いていることが、解明された。今まで分がらなかつたことや、予想されていたことが、実際に観測されて新しい発見などがあつたことは、温暖化が進む地球のことを調べる時にも、役に立つだろう。また、気象衛星「ひまわり」は、地球の大气を観測することで、天気予報に用いら

れ、私たちの毎日の生活に、欠かせない情報を与えてくれる。ぼくは、これらのように、将来の地球や人々の生活を、豊かにする日本の宇宙開発に、たずさわっていきたいと思っています。

だからぼくは、宇宙飛行士になりたい。宇宙で薬を作る実験や火星に行きたい。そして、宇宙へ行く前に有人宇宙探査の研究をしたい。ぼくは、小惑星探査機「はやぶさ」を知っているから、そのミッションにたずさわった人々のあきらめない気持ちや、日本の科学技術がとても素晴らしいことを知った。だから、火星を目指す有人探査計画を考えた。

ぼくが考えた火星ミッションは、OAM (Orbit + Atmosphere) Mars オーム計画という名前だ。

この計画は、宇宙ステーション補給機「こゝろ」とリレーをアップグレードすることから始まる。今より少し大型化して宇宙飛行士が生活するための機能を追加して、こゝろのと

の中で実験ができるように改良する。さらにいくつかには、ロボットアームを取りつけ、イオンエンジンを搭載したものと、ロケットブースターを搭載したものを作る。これらの「このとり」はそれぞれが合体することができるとしておく。アップグレードされた「このとり」は、種子島から次々に打ち上げられ宇宙飛行士が地球から火星へ向かう軌道に、間をとって配置しておく。宇宙飛行士が搭乗した「このとり」をロケットで打ち上げ、その後宇宙空間で、先に火星までの軌道に配置された「このとり」をキチヤチヤし、もともと宇宙飛行士が搭乗していた「このとり」の母船へ次々に合体させ、火星を目指すまでのイオンエンジンの推進力を増強させて早く火星へ到着させるのだ。そうすることで、食料の補給や実験装置の追加も可能になる。先に打上げておいて、それぞれが実験室になるように作られていけば、宇宙船が大きくなるにつれて、実験内容もどんどん

ん増やしていくことができる仕組みだ。
 なせ、このとりこにこだわるのかとい
 うと、このとりこが今まで見せてくれた
 補給活動は、日本の科学技術がとても高いこ
 とを示してきたし、このとりこを大型化
 して日本が有人探査していくことで、世界を
 リードしていけると思うからだ。これまで、
 日本が無人探査機や補給機としての技術がト
 ップクラスであることは、世界も認めている。
 だからこそ、ぼくが宇宙飛行士になる頃には
 さらに次の一歩として、日本人が日本の宇宙
 船で火星への有人探査ミッションを進めてい
 てほしいと思っている。だからぼくは、日本
 の火星への有人探査計画を考えたのだ。
 ぼくが、もしこのオーム計画に参加するこ
 とができ、火星の周回軌道に到着したら、母
 船からロケットブースターを搭載した、この
 のとりこと宇宙飛行士の居住スペースとして
 の、このとりこを分離して、さらにこれら
 を合体させて、一つの探査船にする。そして、

火星へ着陸してこれまで、火星に送りこまれた無人探査機の「スピリッツ」や「キュリオシティ」を使っても探査できなかつた所を、有人探査するのが夢だ。火星にある大きな山や谷、水があったかもしれない場所で、どうして今の火星のような所になつたのか、火星で人間が暮らしていけるのかどうかの調査をしたり、火星の衛星である「フォボス」や「ダイモス」にも着陸して、有人探査を進めて、水を発見したりしてみたい。ぼくのこの目と手を動かしてやってみたい。

ぼくは、これまで講演会で宇宙飛行士や「JAXA」の方々のお話を聞いてきた。ぼくの尊敬するミネルバを開発した吉光先生の上うに、あきらめずに進んでいきたい。

JAXAの「J-STEP」で働く小野雅裕さんに会った時、こんな言葉をかけてもらった。宇宙で会おう。ぼくは、これから宇宙を目指す。